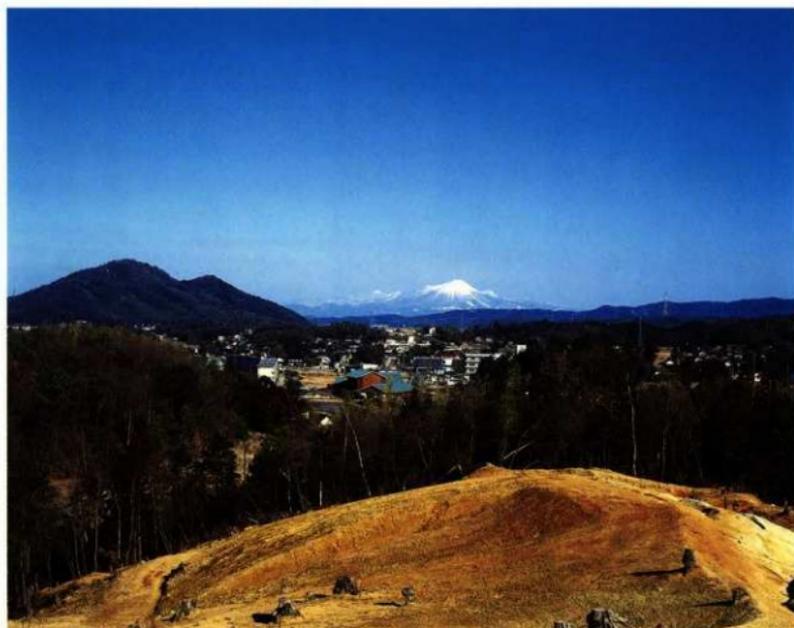


財団法人松江市教育文化振興事業団
埋蔵文化財課年報Ⅸ

平成16年度



財団法人 松江市教育文化振興事業団

表紙写真：指松遺跡から大山を望む

目 次

第1章 財団法人松江市教育文化振興事業団の沿革と組織	1
第2章 平成16年度の発掘調査の概要	3
1. 渋ヶ谷遺跡群	5
・ 渋ヶ谷1号窯	5
・ 渋ヶ谷遺跡	7
・ 措松遺跡	9
2. 山津窯跡	11
3. 久傳遺跡	13
4. 向山西遺跡	15
第3章 平成16年度の軌跡	17
第4章 平成16年度以前の調査	19

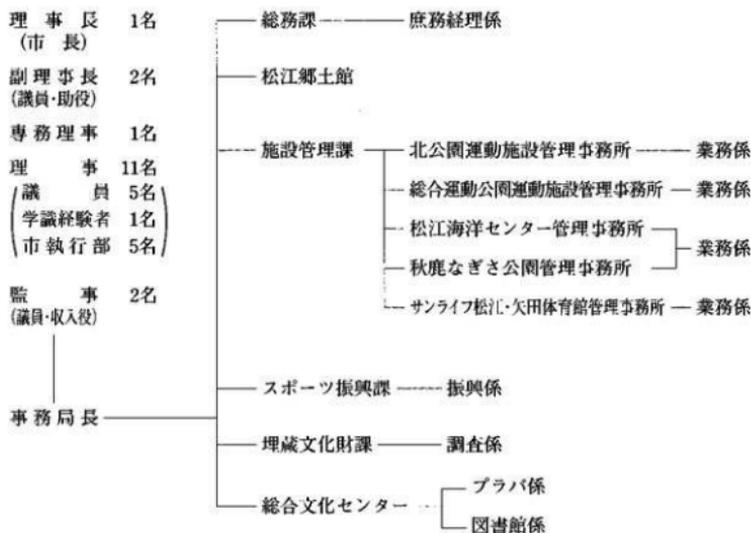


松江市位置図

第1章 財団法人松江市教育文化振興事業団の沿革と組織

- ◇ 設 立 昭和51年(1976年) 4月1日
- ◇ 所在地 島根県松江市学園南1丁目21番地1号(平成10年11月住居表示変更)
- ◇ 目 的 事業団は松江市及び松江市教育委員会の基本的施策に即応して、その委託を受けた事業及び市内の教育・文化・スポーツの振興に関する事業を行い、もって市政の発展と市民の福祉向上に寄与することを目的とする。
- ◇ 事 業 目的を達成するため次の事業を行う。
 - (1) 松江市及び松江市教育委員会から委託を受けた教育・文化・スポーツ等に関する施設の管理運営。
 - (2) 教育・文化・スポーツの振興に必要な事業。
 - (3) その他、事業団の目的を達成するため必要な事業。

◇ 組 織



◆ 埋蔵文化財課

- 設 立 平成5年7月1日
- 所在地 〒690-0886 松江市母衣町180-21番地
- TEL 0852-28-2065
- FAX 0852-28-2038
- E-mail maibun@web-sanin.co.jp
- 業 務 1) 埋蔵文化財の発掘調査に關すること。
2) 埋蔵文化財課の庶務經理(予算及び決算を含む)に關すること。

◆ 平成16年度 調査職員体制(平成17年3月31日現在)

- 理事長 松浦 正敬
- 専務理事 田中寿美夫
- 事務局長 長野 正夫(埋蔵文化財課 課長兼務)
- 調査係長(調査員) 瀬古 諒子
- 主任 門脇 誠也
- 主任(調査員) 江川 幸子
- 主任主事(調査員) 石川 崇 落合 昭久 藤原 哲
- 嘱託職員(調査補助員) 金坂 有史 陶山 隆 高橋真紀子 野津 里佳
秦 愛子 廣濱 貴子
- 嘱託職員(事務) 松本 宏子

◆ 松江市埋蔵文化財業務フローチャート



第2章 平成16年度の調査概要

平成16年度に当事業団で行った発掘調査事業は、発掘調査事業4件(5遺跡)、報告書作成事業は2件(田和山遺跡群：平成9～14年度に調査、菅田横穴墓群・薦沢砦跡：平成15年度調査)の計6件である。

渋ヶ谷遺跡群：松江市大庭町にある松江市総合運動公園内にある遺跡群である。3つの丘陵からなるこの遺跡群の内、中央の第2丘陵(渋ヶ谷遺跡・渋ヶ谷1号窯)、西端の第3丘陵(措松遺跡)の調査を行った。

渋ヶ谷遺跡：北向き斜面を加工して作られた掘立柱建物跡や谷状地形のところにも竪穴色住居を築いている。丘陵頂部は掘立柱建物跡や竪穴住居が検出され、丘陵を大規模に削平して掘立柱建物を作っている。

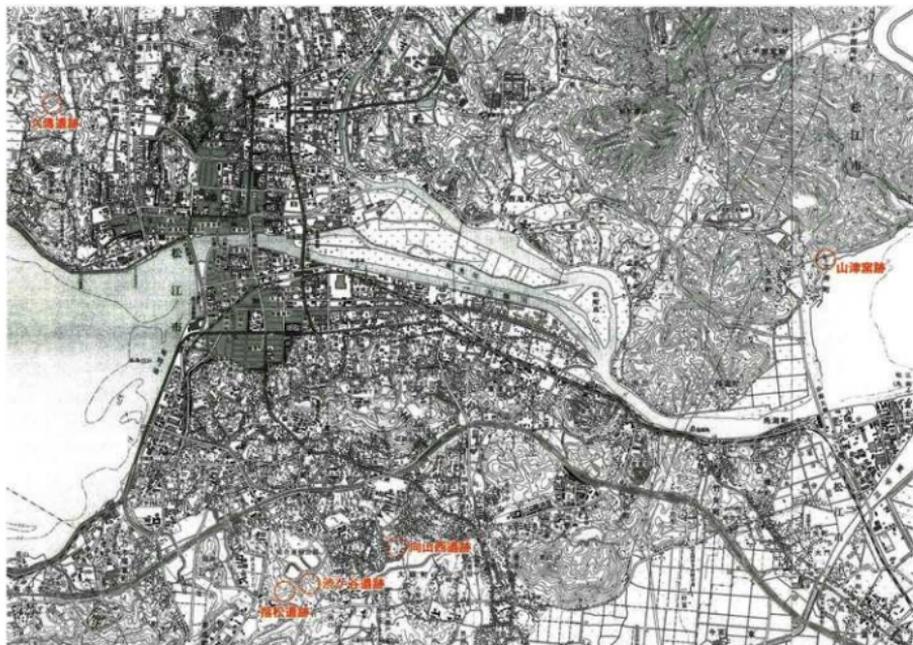
渋ヶ谷1号窯：6世紀前半中葉頃の半地下式穴窯(須恵器)で、非常に残存状況が良く、古代穴窯の構築状況を知る上では絶好の穴窯であった。窯体内ピットを検出したほか炭化構築材の一部が遺存し、構築材の痕跡が天井窯体に残されていた。

措松遺跡：平成14年度から継続して調査が行われており、上端幅が最大で16m、深さが最大で1.8mを測る人溝や溝内に連続した円形土壇(楕円形や不整形形もある)を持つ溝状遺構などが検出された。これらの遺構は道路遺構と考えられている。16年度は前年度までに検出された大溝などの追跡調査などを行った。出土遺物は奈良時代頃の須恵器や近代の陶磁器などが出土している。

山津窯跡：松江市大井町に所在する。平成13年度から継続的に調査が行われている。これまでの調査で2基の窯と大量の須恵器が出土している。16年度の調査は調査区両側に1号窯・4号窯が検出された近接地点を調査した。明確な遺構は検出されなかったが、窯壁の塊が大量に出土し、7世紀中～後半の須恵器が出土した。(平成15年刊行の年報Ⅵにも掲載)

久傳遺跡：松江市比津町に位置する。低丘陵に開かれた谷の東向き斜面から掘立柱建物跡を検出した。建物の総数は少なくとも7棟(内、6棟は6世紀末頃、残りの1棟は9世紀後半頃の可能性)。遺物は須恵器・土師器などが出土した。

向山西遺跡：松江市古志原町に位置する。丘陵上に立地し、頂部と斜面から弥生時代後期初頃の竪穴住居跡2棟と加に段1箇所、中世築と思われる土壇2基、時期不明の落とし穴3基、焼土壇1基、道と思われる溝状遺構1条が発見された。



平成16年度遺跡調査地位置図

遺跡名	所在地	調査期間 (H16/4～H17/3)	調査面積 (㎡)	時期	遺跡の種別	調査担当者
1 渋ヶ谷遺跡	大庭町	4月20日～10月13日	5720	古墳時代	集落址	江川・石川
渋ヶ谷1号窯				古墳時代	窯跡(須恵器)	
措松遺跡		10月21日～3月18日	1780	奈良時代	道路	
2 山津竈跡	大井町	4月12日～5月22日	440	奈良時代	散布地	藤原
3 久傳遺跡	比津町	10月4日～12月27日	630	古墳・平安時代	集落址	瀬古
4 向山西遺跡	古志原町	1月4日～3月16日	570	弥生時代	集落址	瀬古

平成16年度 発掘調査一覧

しぶがだに 洗ヶ谷遺跡群

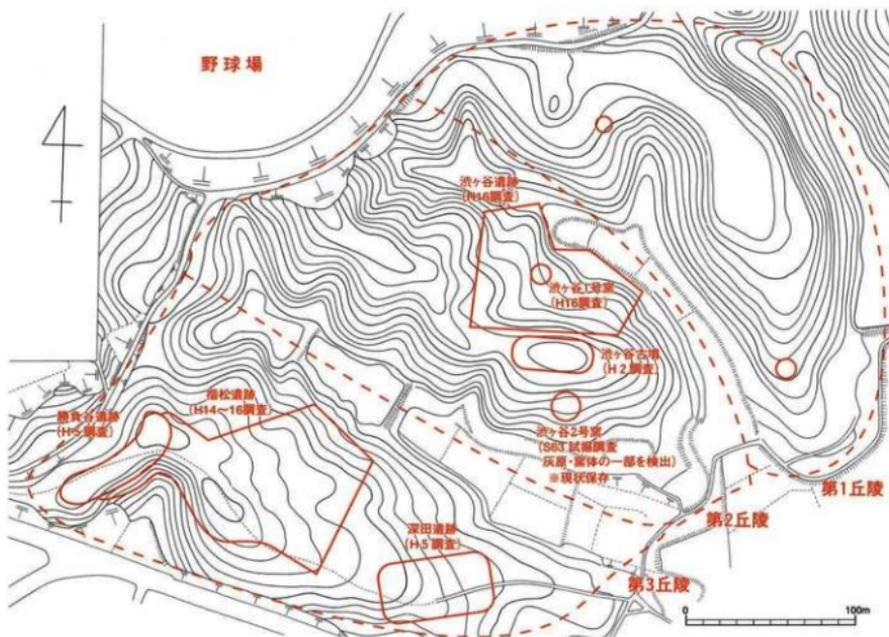
洗ヶ谷遺跡群は松江市大庭町にある総合運動公園の隣接地内に位置する。遺跡群は北西—南東方向に派生する3つの低丘陵に所在し、昭和60年・平成2年にわたって試掘調査が行われた。また平成2年・5年には本調査が行われている(洗ヶ谷古墳・深田遺跡・勝負谷遺跡)。

洗ヶ谷遺跡・洗ヶ谷1号窯は中央部の丘陵(第2丘陵)、措松遺跡は西端の丘陵(第3丘陵)それぞれに位置している。措松遺跡に関しては平成14年度から継続して調査が行われている。

しぶがだに 洗ヶ谷遺跡

洗ヶ谷遺跡は南北に派生する丘陵部と標高44m～28mの北向き斜面が存在する。北向き斜面は非常に風化しやすいシルト質の地山で、遺構の残存状況は悪かったが、加工段4ヶ所、加工段の可能性がある遺構1ヶ所、溝状遺構1ヶ所、小炭焼土壌9ヶ所を検出した。加工段は柱穴と思しきピットは検出したものの、柱の配列や規則性などが見出せないため、明確な建物が建っていたかは不明だが、建物が建っていた可能性はある。

谷部は比較的緩やかな斜面である。加工段2ヶ所、溝状遺構4ヶ所、小炭焼土壌3ヶ所、多数のピット



洗ヶ谷遺跡群各遺跡位置図

トを検出した。なかでも1つの加工段は比較的残存状況が良く、床面には持ち運び式の竈約半個体分が残っていたほか、6世紀前半の須恵器片や時期不明の土師器片多数が出土した。これは後述する渋谷1号窯の時期と符合し、その関連が注目される。

丘陵部には建物跡が想定可能な加工段4ヶ所、想定できない加工段が5ヶ所、ピット列をとなく加工段1ヶ所、3間×3間の掘立柱建物跡が3棟（うち1棟は削平されているため確定はできないが）、竪穴住居1棟が検出された。その他、溝状遺構や土壌、焼土壌なども検出されている。

建物が想定できる加工段の中で下の写真に見られるような焼失？したと思われるものが確認されている。焼土や炭化物が多量に確認され、特に北東隅の壁面には焼土痕が明確に残っていた。しかし焼土や炭化物が住居址全面に見られず、焼失したものなのか、もしくは一部だけ被災したものかは不明である。出土した須恵器の形状から7世紀前葉の遺構ではないかと思われる。

また丘陵部を大規模に削平して平坦面を作り、掘立柱建物？を作っている。特徴的なのは柱穴と思われるピットの中に、平面形が隅丸方形をしたものが多数あり、なぜこのような形になったかは今のところ不明であり、現在検討中である。出土遺物から6世紀末から7世紀初頭の遺構ではないかと思われる。

竪穴住居は規模が4.5×5.0mを測るもので、平面形はほぼ正方形を呈する。中央に焼土が確認され、その両側に柱穴と思われるピットが検出された。北東隅・南東隅からは直径1m前後の土壌が検出された。用途・目的はわからない。

丘陵部から出土した遺物は6世紀後半から8世紀頃までのものが大半である。

調査終盤、ラジコンヘリによる空中撮影を行うことになった時のことである。撮影に供えて遺跡全体を清掃し、撮影を待つばかりとなった翌日に雨が降り、1週間後に再び清掃していると、今度は突然の夕立によってまた白無し。あまりの集中豪雨で遺跡に川のような流れができる始末。それ以後、再



焼土・炭化物検出状況

びの延期を経て4度目にしてようやく撮影することができた。“2度あることは3度ある”とは言え、ほとほと困り果てた。この仕事は天候に左右されるが、暑く、雨がほしい時には降らず、雨が降ってほしくない時に限っていやというほど降る。天気に泣かされた夏の調査であった。（石川 崇）



焼失？住居完掘状況

しづがだに 渋ヶ谷 1 号窯

【立地】

渋ヶ谷遺跡渋ヶ谷地区の東面傾斜地に位置している。標高は35.50m～37.70mを測る。

窯の北方は西から東に開く狭い谷地形になっているが、少なくとも4～8月の調査中に谷から風が吹き上がってくるような状況はみられなかった。平常時は風あたりが弱い場所である。

【遺構】

半地下式窖窯で、主軸は等高線にほぼ直交し、全長7.3m、床面最大幅1.6m、床面傾斜角度は14°5'～16°を測り、平面形は焚口を除けば細長いUの字状を呈していた。床面は滑らかで階段状の加工はみられなかった。

この窯は残存状況が非常に良好で、古代窖窯の構築状況を知る上では絶好の窯跡であった。窯体内ピットを検出したほか炭化構築材の一部が遺存し、構築材の痕跡が大井窯体に残されていたのである。遺構から窯の構築過程を復元すると、まず窖窯の床面傾斜に近い傾斜地を選定し、窯の形状にあわせて地下部を掘る。次に、窯の中軸線上に直径8～10cmの先端枕状の柱を約4m間隔で2本打ち込んでその上に縦板をわたして主軸とする。そして、丸材や板材などの先端を枕状または切り落とし加工を施し、窯左右の地山肩部に刺し込んでアーチ状にして主軸にわたす。場所によっては床面にも刺し込んでいる。刺し込み間隔は互いが密着するくらいの間隔で、隙間を設けようとした形跡はみられない。その後、外貼粘土、内貼粘土を施し（内部天井には施さない）乾燥させ、保護土を盛って空焚きするといったところであろうか。

この窯の構築状況の中で特徴的なことは、左右にわたる構築材の密度が非常に高いということである。堅固な骨組みを作ることにより、天井の重い粘土に耐えうる構造を目指したものである。このような類例は今のところ見つからないが、それは須恵器窯の調査例が少ないためであり、今後の調査に注視していきたい。

【時期】

この窯は内外ともにほとんど遺物を伴わなかったため、構築・操業時期は科学的分析に頼るしかなく、その結果は6世紀前半中葉頃と判明した。灰原が検出できなかったのは、広い調査区内で焼き損じ等の須恵器がほとんど出土しなかったことから窯の稼働回数が少なかったことが考えられる。須恵器は炭の破片しか出土せず、窯形態と須恵器編年を結びつけることができなかったことは何とも残念なことである。

渋ヶ谷1号窯は、大井地区に須恵器窯が集中する以前に大庭町で操業された数少ない須恵器窖窯の1つである。以前の試掘調査で、同丘陵の端部付近で5世紀末の須恵器窯跡が発見されており、この丘陵にはほぼ同じ時期に少なくとも2基の窯が構築、操業されていたことになる。

(江川幸子)



波ヶ谷1号窯全景(東より)



構築材の痕跡

まぐり まつ 措 松 遺 跡

平成13年度から継続して行われている遺跡で、前年度までに上端幅が最大で16m、深さは最大で18mを測る溝状遺構（大溝と呼んでいた）、溝内に円形土壇（楕円形や不整形円形もある）を持つ溝状遺構などが検出された。本年度は大溝の追跡調査を中心に行われた。

前年度まで“連続ピットをとこな溝状遺構”は“波板凹凸面”と呼ばれる道路遺構の一部ではないかと思われる。“波板凹凸面”の用途としては

- ① 路床構築痕跡（作道に伴う工法）
- ② 枕木等の痕跡（道路の利用形態に関わる痕跡）
- ③ 通行痕跡（自然発生的なもの）

などが考えられている。

本遺跡の場合、地盤の状況から①路床構築痕跡と考えられる。この場合、道路が水の流れによって削られるの防ぐとともに、補強すると言う側面を持つ。ピットの土層から粘質の土が確認されている。ピットはあらかじめ埋められており、しかも透水性のある土を入れることによって水を吸収しやすくしている。

本遺跡で確認されたこの遺構は斜面が多く、通常では水の流れによって底面が削られてしまうことが想定される。そのため斜度のきついいところではピットが深くなり、斜度があまり無いところではピットは浅い。斜面を登りきってしまうとなくなってしまう。

“大溝”と呼ばれた遺構は結局、本年度の調査範囲の中で消滅してしまった。用途は道路として使われていたと思うが、途中の土層で見られた“水平堆積層”の謎はわからないままだった。

この遺跡は当初“古代山陰道”の一部ではないかと思われたが、調査を進めていくうちにその期待は外れていった。確かに出雲国府から古代山陰道に推定される松本古墳群（松江市乃木福富町）を直線で結ぶと近辺を通ることになる。しかし道幅が狭く直線的ではないため、“官道”とは言い難い。遺跡の南側を走る道路の近辺ではないだろうか？

ではこの遺跡は、ということだがあくまでも想像ではあるが、この丘陵（第3丘陵）周辺に何か施設のようなものがある、官道からその施設に向かうための進入路ではなかったのだろうか。遺構に伴うものではないしろ、遺物は道路遺構にしては多く、また前年度には土馬も出土していることなどから施設があってもいいのではないだろうか。現代的に言えば、高速道路でサービスエリアに入るための進入路ではなかったのではないだろうか。

この冬は“暖冬”と言われていた。喜んでいたのもつかの間、現実には寒い日々が続いた。“暖冬”とはいえ、冬は寒い。あたりまえと言えばあたりまえのことだ。風が異常に冷たく、きつく吹いたときには写真撮影用の足場からの撮影も怖い思いもした。

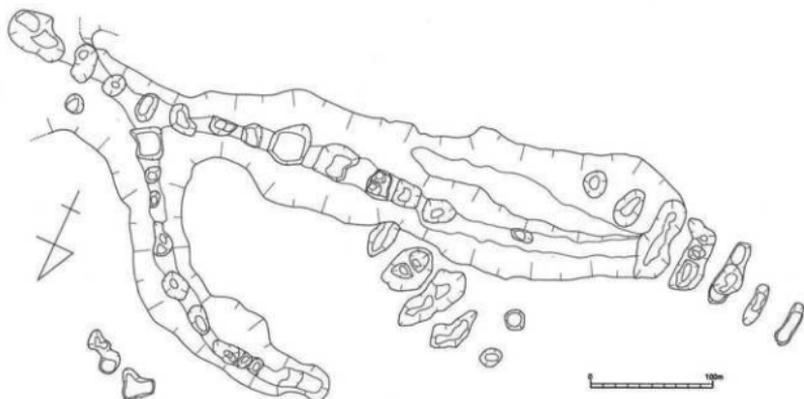
前年度も同じような時期に調査だった。屋外の温度計



調査指導会風景

が-5℃を示した時には、南京錠の鍵穴が凍ってしまったこともあった。鍵が開かない中には入れず、同僚と手で鍵を暖めて溶かして鍵を開けたことがあった。そういうことはあまりしたくないものである。

(石川 崇)



波板凹凸面平面図



波板凹凸面完掘状況

やま づ 山 津 窯 跡

山津窯跡は松江市大井町に位置している。平成13年度より継続的に調査を実施しており、平成13年度にA区～D区を、平成14年度にE～F、H～N区を、平成15年度にJ～2区を、平成16年度にH～2区を、平成17年度にG区をそれぞれ調査した。既述の調査に関しては各年度の年報をそれぞれ参照していただきたい。

この事業は平成17年度末に報告書刊行を予定しており、現在、出土遺物の整理に追われている。平成16年度の現地調査（H～2区）の内容については、昨年度の年報において既に概報済みなので、ここでは整理作業の進捗状況を簡単に報告しよう。

山津窯跡・山津遺跡は須恵器の窯跡、つまり須恵器を作っていた場所とその周辺なので大量の須恵器が出土した。現在の総数はコンテナ（長55cm×幅38cm×深18cm程度）で約819箱もの量が出土している。内訳はA区5箱、B区1箱、C区23箱、D区10箱、E区46箱、F区36箱、G区33箱、H区468箱、I区143箱、J区48箱、K区0箱、L・M・N区6箱であり、この他にコンテナには納まりきれない大甕4個体、置き場に困る窯壁片が30箱程ある（以上は現時点での概数なので、最終的には変化する可能性あり）。このうち、実測用に選別したコンテナ数に限っても、A区1箱、B区1箱、C区8箱、D区2箱、E区6箱、F区10箱、G区10箱、H区67箱、I区10箱、J区8箱、L・M・N区1箱もの膨大な数で途方に暮れてしまう量である。一時は土器の重みで、仮置きしているプレハブの底が抜けてしまった程だ。

さて、出土遺物の整理は主に次のような順序で行う。

- ① 先ず上のついた土器を洗い（洗浄）
- ② 出土状況が分かるように、土器そのものに細かいデータを書き（注記）
- ③ バラバラの土器をジグソーパズルのようにつなぎ合わせ（接合）
- ④ その中から報告する土器を選び出し（選別）
- ⑤ 選んだ土器の細かな図面を書き（実測）
- ⑥ 実測した図面を報告書のどのページに載せるか割付し（レイアウト）
- ⑦ 最終的に綺麗に製図する（トレース）。

また、これとは別に遺物写真の撮影、現場の図面や写真の整理もあり、文章を書く段になると、事務的な手続きの他にも、類例を調査するなど出土した遺物の調査も怠るわけにはいかない。

こういった作業を調査員1名、補助員1名、内業作業員4名で行わなければならないので大変である。日数や予算はかぎられており、泣き言は許されない。少しでも時間を短縮するため、洗浄は外業作業員さんと共に近くの川で洗い、注記は注記マシーンという機械を使用した。

それでも、最終的には昔ながらの手作業である。幸いにも、優秀な補助員さんや内業さんに支えられ、16年度には洗浄、注記作業を終え、実測も大部分終了することができた。まだまだ、作業は山積みであるが、17年度も報告書刊行に向け、鋭意、努力中である。

（藤原 哲）



土器の実測……………図化の仕事はセンスが問われます。



接合と注記……………機械があっても最終的には人の力が頼りです。

く でん 遺 跡

【所在地】 松江市比津町567番地

【調査原因】 宅地造成（民間）

【調査期間】 平成16年10月～12月

【調査の概要】

本遺跡は、標高30m余りの低丘陵に囲まれた北に落ちる谷の東向き斜面に立地している。調査前から緩傾斜の日立った5箇所から加工段が見つかり、それぞれに掘立柱建物跡を検出した。建物の総数は少なくとも7棟あり、そのうち6棟は6世紀末頃のものであり、1棟は9世紀後半頃の可能性があるものである。遺物は、それぞれの加工段および遺物包含層から須恵器、土師器などの土器類を中心にコンテナ約20箱分が出土した。

加工段は斜面を「コ」の字形に掘り込んで平坦面を造りだし、壁の直下に排水溝を設けている。平州面に盛上が施された箇所も見られた。

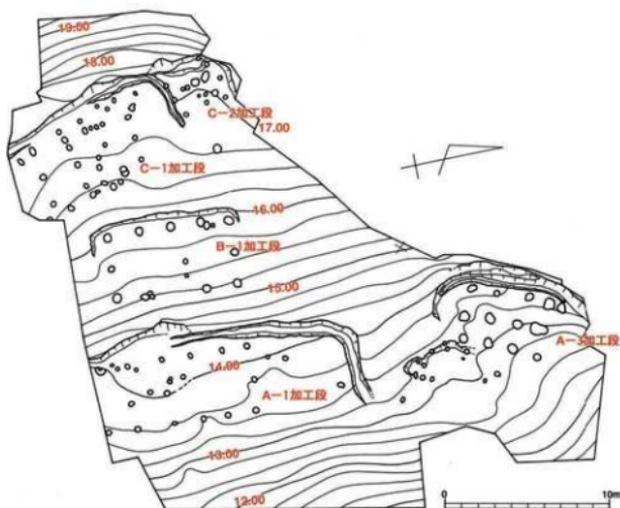
○6世紀末の建物跡

4箇所の加工段（A-1、A-3、B-1、C-1）に延べ6棟（同時期には最大5棟）の掘立柱建物があり、そのうちA-3加工段の1棟は高床倉庫で、残りは住居だったものと思われる。出土遺物は須恵器、土師器などの土器類が大半で、食膳具、煮炊具、丹塗りや手捏ねの祭祀用品などの種類があるが、住居5軒分には食器も煮炊きの道具も数が少なく、おそらく何かの事情で他の場所へ移動し、短期間で廃絶したものと考えられる。

○9世紀後半代

C-2加工段に想定した遺構は、柱穴の小さな床面積の狭いもので、日常生活に耐えられるとは思われず、遺物も少量である。平安時代人がこの谷奥で何らかの活動を行ったのは確かであるが、その詳細について明らかにすることは困難と言わざるを得ない。

現在のところ、久傳遺跡の周辺では比津小丸山古墳（全長26mの前方後方墳、未調査、時期不明）を除いて遺跡がほとんどわかっていない。今回、古墳時代後期の集落の一端を明らかにすることができ、当地の古代史を語る上で大変意義深い調査であったと言える。（瀬古諒子）



久傳遺跡全景 (1/300)



久傳遺跡全景 (東から)

むこう やま にし 向 山 西 遺 跡

【所在地】 松江市古志原7丁目1770-1

【調査原因】 宅地造成（民間）

【調査期間】 平成17年1月～3月

【調査の概要】

本遺跡は標高38m余りの丘陵上に立地している。丘陵頂部と斜面から弥生時代後期初頭の竪穴住居跡2棟と加工段1箇所、中世墓と思われる土壇2基、時期不明の落とし穴3基、焼土壇1基、道の跡と思われる溝状遺構1条が発見された。

○弥生時代の遺構

竪穴住居跡1（S I - 0 1）

床面直径4.8mを測る円形の竪穴住居跡で、周壁の直下には壁体溝が一周し、北西の壁を穿って排水溝が付設されている。支柱穴の痕跡は不明瞭で、柱は床に直に立てられていたか、数センチあったごく浅い柱穴を精査の段階で削ったかもしれない。しっかりした支柱穴を持たないこの竪穴の場合、上層の構造が問題である。遺物は後期初頭の甕片、磨石などが出土した。

竪穴住居跡2（S I - 0 2）

床面直径6.6mを測るかなり大形の円形竪穴住居跡である。支柱穴は6本あり、深さ70cm前後のしっかりしたものである。床面中央部には中央ピットがあり、底には有機質の腐植層が数センチ見られた。遺物は埋土上層から土器小片が出土しただけであった。

加工段

緩斜面に溝を切り、その谷側に平坦面を設けたものである。平坦面に柱穴は見当たらなかった。簡単な施設と物置場所、作業場所などの機能が想定される。

○時期不明の遺構

中世墓？（S K - 0 1 - 0 2）

直径30cmと50cmの小土壇で、中から鉄さびの付いた炭の塊と鉄の角釘が出土した。いずれの穴も焼けた形跡はなく、穴の周辺にも炭は出なかった。他の場所でも入れ物ごと焼いた後この場所に穴を掘って埋めたものである。八雲村谷ノ奥遺跡の例から中世墓ではないかと思われるが人骨は確認できなかった。

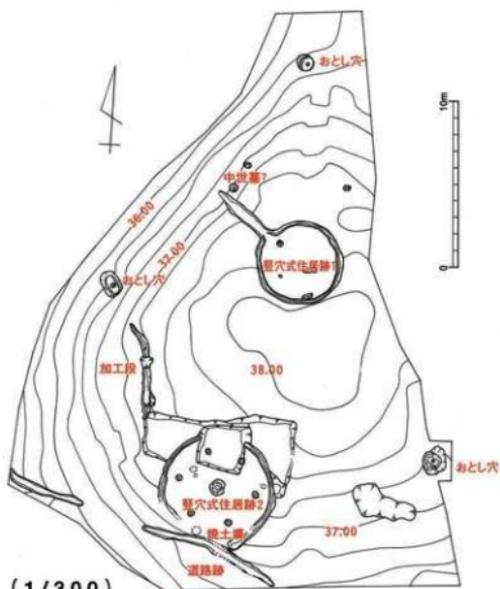
落とし穴（S K - 0 3 - 0 5）

いずれも底面の中央にピットが穿たれていた。遺物は出土せず、時期は不明である。

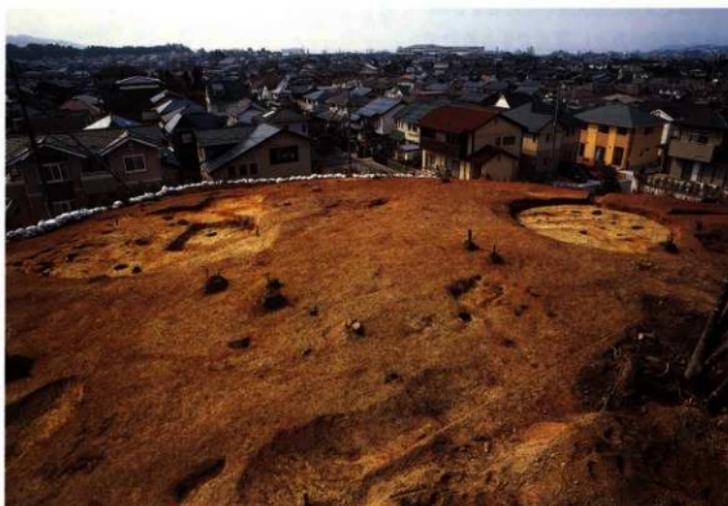
丘陵頂部で検出した2棟の竪穴住居と加工段1箇所は切り合いがなく、その位置関係から見て同時期に併存していたものと想定してみたが、竪穴住居跡2棟の作りは円形で壁体溝を持つこと以外に共通点が見出せず、規模、支柱穴のあり方、中央ピットの有無、屋外排水溝の有無など相違点が目につく。どんな建物が建っていて、どう使われていたのか、またこの風の強い丘陵上の、しかも生活用水を

わざわざ運び上げねばならない不便な場所に立地しているのはなぜかなど、今後問題にしていかなければならないことが数多くある。

(瀬古諒子)



向山西遺跡全体図 (1/300)



向山西遺跡全景 (東から)

第3章 平成16年度の活動について



当事業団では平成16年度に発掘調査以外にも様々な活動をしました。ここでは一部ですが紹介します。

10月24日に松江市菅田町にある菅田会館で「菅田会館祭り」が行われました。催し物の一環として会館の一室で「菅田横穴墓群」の遺物や写真パネルの展示を行いました。「菅田横穴墓群」はソフトビジネスパークの進入路建設に伴って平成15年から16年度初めにかけて調査を行いました。調査地が会館のすぐ近くで近所と言うこともあり、調査中にも様々な便宜を図っていただいていた。 (いずれの写真も菅田会館から提供していただきました。)

当日はご近所の方々と初め、多くの見学者がいらしゃいました。なかには「地元このような遺跡があるとは知らなかった。」「すばらしい遺跡が同じ町内にあるのは誇らしい」などさまざまなご意見をいただきました。

なかなか地元の方々に還元できる機会が少ない中、このような形で地元の方々と触れ合い、また文化財に対して身近に感じていただくことができ、大変有意義な催しでした。



1月には向山西遺跡で市民の皆さんを対象とした遺跡現地説明会を行いました。当日は大雪が降り、積雪10cm以上の中、行なわれました。見学者の方は来られないだろうと言う予想に反して、8名の方々が大雪の中、見学に来られました。しかし10cm以上雪が積もっているため、遺構の様子はわからず、遺物の展示は現場作業員用のプレハブで行いました。

悪天候にもかかわらず、見学に来られた方々、ありがとうございました。

コ ラ ム

この夏は異常に暑かった、という印象だ。夏が暑いのはあたりまえなのだが、春先には「夏は冷夏かも」と言う予想も聞いたと思ったのに…。聞き間違いだったのかな？

とにかく暑くても現場はやらなくては。そんな中、何度か熱中症、熱射病になりかけた。一日の仕事が終わる頃には、体はフラフラするし、頭は痛くなるし、といった具合が続いた。

現場事務所に近くには(幸いor不幸)ジュースの自動販売機があった。多いときには一日2本から3本の清涼飲料水を飲み干した。またこれがおいしい、疲れた体には何よりのアイテムであった。普段はあまりそう思わなかったのが、異常なまでにおいしく感じられたのも、体も甘いものを欲しているのだと思い、何も考えずに良く飲んだ。

しかし…、夏も終わり、涼しくなりかけた頃、定期健康診断を受けた。なんと体重が春先から3kg増、その他の検査数値も上がっているではありませんか。ガーン。

これではまずいと思い、ダイエットをしなければ、と決意。まずジュースをお茶に変える事からはじめた。あとは、といってもこれと言った特別なことは全くしていない。でも努力の結果、ピーク時から比べると9~10kgやせ、10数年ぶりに60kg台に到達した。よーしこの調子であと3kgは…という欲を出している今日この頃である。

みなさんも暑いからと言ってジュースの飲み過ぎは太る元ですよ(今回の経験でわかりました)。でも暑い日に炭酸飲料を飲み干す、これもやめられないですよ。さてみなさんはどうですか？

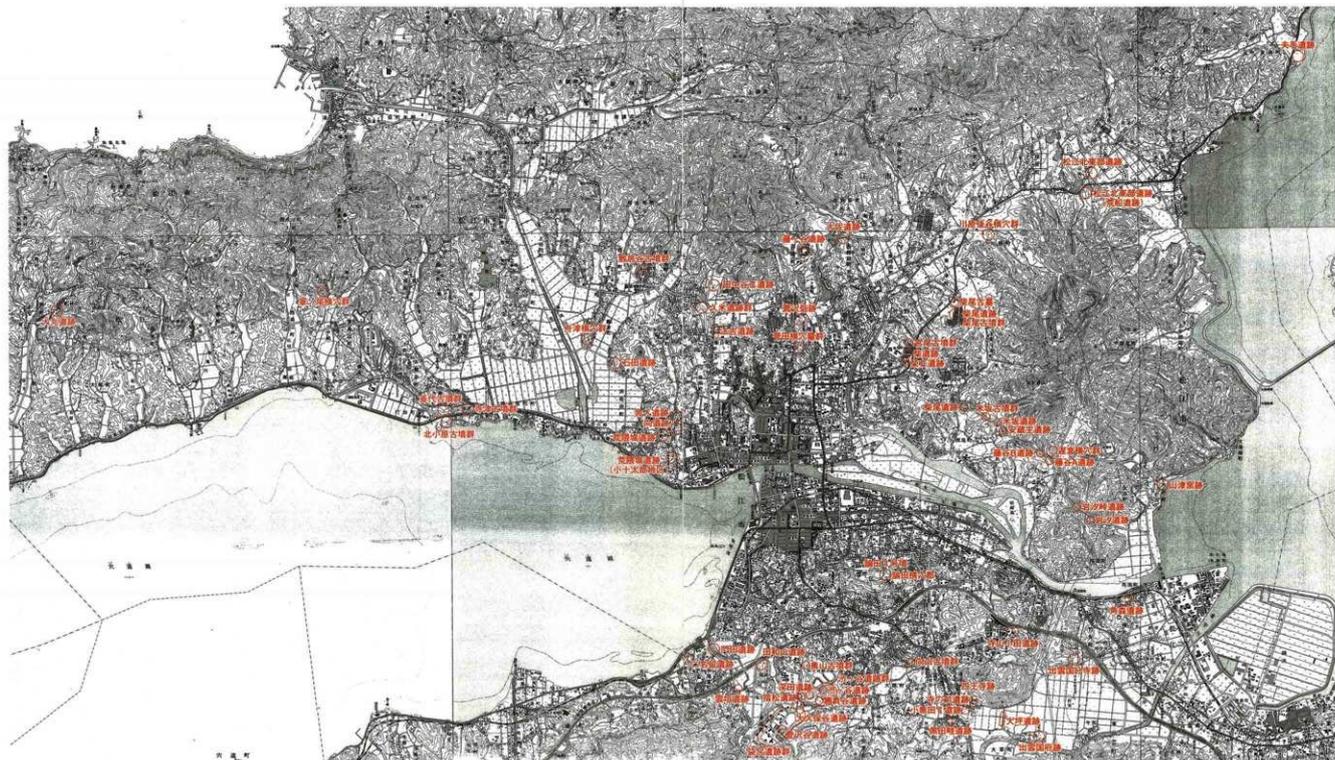


暑く、強い日差しの中日射病にならないかな？



一夏の色？(こげた色かな？)

第4章 平成16年度以前の発掘調査



平成16年度以前の調査一覧表

年度	遺跡名	所在地	遺跡の概要	報告書	
平成 5年度 (1993年)	釜代1号墳 (寺津11号墳) (北小原3号穴)	西浜佐陀町	前期古墳。主体部2基確認。第2主体部は粘土層を伴う長大な割竹型木棺で、木銀朱・鏡・玉類出土。第1主体部は現状保存。	平成6年 (1994年) 刊行	
			中期の方墳。墓底で礫床を検出。		
			現状保存。		
	菅沢谷横穴群	乃白町 (現 平成町)	6世紀後半～7世紀前半の12穴の横穴墓群。うち3穴から9体の古人骨出土。		
	向遺跡	国屋町	奈良時代～平安時代の集落跡検出。		
	論田4号墳 (付論田横穴部)	西津田町	(事業団設立以前の調査報告書作成事業)古墳時代後期の円墳。昭和60年(1985年)に調査された論田横穴墓群の調査成果も掲載。		
	柴尾遺跡	上東川津町	古墳時代後期の方墳と主体部3基持つ前期古墳を検出。(1号墳・2号墳)。その下層から縄文時代後期の黒曜石を中心とする石器生産遺跡。		
	角森遺跡	八幡町	弥生後期～古墳時代にかけての遺物包含層。		
	敷居谷古墳群	東生馬町	5世紀の方墳を含む計3基の方墳検出。後世の祭祀関連遺物も出土。(1号墳・2号墳・5号墳)。		
	出雲国分寺跡	竹矢町	完形で良質な瓦ばかりの瓦溜り検出。		平成7年 (1995年) 刊行
	出雲国府跡	大草町	直接国府に関連する遺構は検出されなかった。		
	松江北東部遺跡	上本庄町	遺物包含層のみ検出。遺構は検出されなかった。		平成11年 (1999年) 刊行
	岩沙峠遺跡ほか	大井町	一字一石経を含む礫石経塚検出。		
深田遺跡	大庭町	奈良時代～平安時代の道路状遺構と円形土壇列を検出。	平成17年 (2005年) 刊行予定		
勝負谷遺跡	大庭町	さいの神と横石塚、古代と考えられる道路状遺構を検出。			

年度	遺跡名	所在地	遺跡の概要	報告書
平成 6年度 (1994年)	柴尾遺跡ほか (柴尾古墳群)	上東川津町	縄文土器を伴う石器生産遺跡と古墳を調査。 前期古墳主体部(割竹型木棺)から翡翠製勾玉、鉄鏃出土。ほかに中期以降の古墳1期。 (3・4・5・6号墳)	平成7年 (1995年) 刊行
	敷居谷古墳群	東生馬町	中期末の方墳1基。後期初頭の方墳の主体部から大刀・刀子各1点出土。(3・4号墳)	
	舟津横穴群	薦津町	横穴墓2穴と近世貯蔵穴3穴を検出。	
	筆ノ尾横穴群	東長江町	6世紀後半～7世紀中頃の6穴の横穴墓群。 1穴に6体埋葬の横穴墓あり。	
	寺の前遺跡	山代町	自然流路からの布目瓦、陶製駒尾、面門硯、輸入陶磁器、国産陶磁器片が出土。	
	黒田峠遺跡	大庭町	奈良時代の土庫内から墨書土器・製塩土器・律令様式の上器が出土し、役所関連の遺跡が近辺にあったことを示す。中世末期の土庫墓6基検出。	
	一木留遺跡	乃木福富町	古墳時代と近世の遺物包含地。	平成8年 (1996年) 刊行
	向山1号墳	大庭町	トレンチ調査で未盗掘の石棺式石室発見。	
松江北東部遺跡	上木庄町	遺物包含層のみ検出。遺構は検出されなかった。	平成11年 (1999年) 刊行	
米坂遺跡	西尾町	古墳時代中期～後期初頭の掘立柱建物跡群検出。		
平成 7年度 (1995年)	宮尾古墳群ほか (柴尾遺跡) (柴尾古墳)	西川津町 上東川津町	石器や石族のほか、室町後期～安土桃山時代の五輪塔2基のほか、11基の土壇群を検出。	平成8年 (1996年) 刊行
	四王寺跡	山代町	調査範囲が狭く、四王寺との関連性を判断するには至らなかった。	
	久保遺跡	乃白町	焼土塊、ビットを検出。遺物は数点出土したのみ。	
	川原後谷横穴群	川原町	墓道の一部のみ調査。	
	寺山小田遺跡	矢田町	古墳時代中～後期の集落跡検出。2棟の建物内から玉類出土。	

年度	遺跡名	所在地	遺跡の概要	報告書
平成 7年度 (1995年)	向山古墳群	大庭町	32×20m以上の方墳。墳裾から子持壺出土。石棺式室内の副葬品は掻き出されており、羨道から前庭にかけて馬具、武器類、玉、須忠器が出土。	平成10年 (1998年) 刊行
	袋尻遺跡群	乃白町 (現 平成町)	竪穴住居跡7棟、土壇5基、後期古墳2基、近世墓2基などを検出。	
	遅倉横穴群	朝酌町	6世紀後半を中心に7世紀前半まで続く計5穴の横穴墓。山陰地方初現期タイプ。	平成11年 (1999年)
	松江北東部遺跡	上本庄町	遺物数片が出土。遺構は検出されなかった。	刊行
平成 8年度 (1996年)	小無田Ⅱ遺跡	山代町	山代郷南新遺院(四王子)の瓦を焼いた8世紀代の瓦窯跡3基を検出。2基は現状保存。	平成7年 (1995年) 刊行
	柴田遺跡	西川津町	弥生時代終末期の玉造工房跡を含む竪穴式住居跡3等、掘立柱建物跡12等、柱穴列3条等を検出。	平成10年 (1998年) 刊行
	袋尻遺跡群	乃白町 (現 平成町)	17ヶ所の調査で、古墳6基、竪穴式住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、溝状遺構3条、土壇3基、横穴墓3穴、古墓群を検出。	
	米坂古墳群	西尾町	古墳時代中期～後期の方墳7基と墳丘を持たない埋葬施設8基を検出。	平成11年 (1999年)
	松江北東部遺跡	上本庄町	竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、祭祀跡などを検出。遺物は子持勾玉のほか、大量の土師質土器が出土。	刊行
平成 9年度 (1997年)	大遺跡群	西持田町 (現 北穂町)	弥生時代終末～古墳時代初頭の墳丘墓を含めた計8基の埋葬施設、土器棺2基、及び戦国時代の白鹿城塞群の一部と思われる城跡を検出。	平成11年 (1999年) 刊行
	米坂古墳群 柴尾遺跡	西尾町	古墳時代中期～後期の古墳群。柴尾遺跡は遺構・遺物は検出されなかった。	
	松江北東部遺跡 (荒瀬遺跡)	上本庄町	縄文時代の有舌尖頭器のほか、中世の掘立柱建物跡2棟、井戸状遺構1基を検出。	平成17年 (2005年)
	出和山遺跡	乃白町	弥生時代前期～中期の3重の環壕を検出。山頂からは櫓列と掘立柱建物跡、古墳前期の墓塚を検出。銅剣形石剣、石鏃、石斧、弥生土器などが出土。	

年度	遺跡名	所在地	遺跡の概要	報告書
平成10年度 (1995年)	夫手遺跡 （トコテ）	手角町	長海川河口の洪水により形成された遺物包含層を調査。漆液容器、木製の椀は約6000年前のもので、全国でも最古級に属する。	平成12年 (2000年) 刊行
平成 11年度 (1999年)	久米遺跡群 （クミ）	比津町	古墳時代後期～奈良時代の集落。竪穴式住居跡1棟、掘立柱建物跡11棟検出。甕・甕など遺物多数出土。	平成12年 (2000年) 刊行
	門田遺跡 （カドタ）	乃木福富町	弥生時代中期の自然流路、溝、土塚、ピット、杭列などを検出。付近の田和山遺跡との関連で注目される。	
	大坪遺跡 （オホツツ）	山代町 大草町	溝と小ピットを検出。弥生、中世の上器片と「恐々謹解…」と書かれた木簡が出土。	平成17年 (2005年)
	田和山遺跡 （タニヤマ） (平成10年度を含む)	乃白町	環壕外側の斜面より、弥生中期、古墳中期、平安～中世の竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、加工段（掘立柱建物跡？）を検出。	
平成 12年度 (2000年)	北古原古墳群 （キタコハラ）	西浜佐陀町	石棺2基検出（うち1基が現状保存）。石棺内部から小型仿製鏡が出土した。墳裾から土器棺2基検出。	平成12年 (2000年) 刊行
	田中谷Ⅲ遺跡 （タナカヤⅢ）	法吉町	掘立柱建物跡と自然河道を検出。遺物は弥生時代後期の土器が中心で、木製品も出土。	平成13年 (2001年) 刊行
	雲垣遺跡 （クモガキ）	乃白町	弥生時代中期を中心とした遺物包含地。土器類のほか、木鏝、田下駄などの木製品も出土。	
	大坪遺跡 （オホツツ）	山代町 大草町	自然流路にはさまれた微高地の存在を上層により確認。調査地北側のトレンチでは木製品出土。	平成14年 (2002年) 刊行
	法吉遺跡 （ホウキ）	法吉町	自然流路から縄文土器の細片や黒曜石が出土。	
	舎人遺跡 （ヤト）	国屋町 黒田町	城跡に関連する遺構は確認されなかった。近世以降の遺物が出土。	
平成 13年度 (2001年)	奥山古墳群 （オクヤマ）	上乃木町	古墳時代中期頃の古墳群7基のうち、6基を調査。土師器、鉄剣、鉄鏝等出土。	平成14年 (2002年) 刊行
	大坪遺跡 （オホツツ）	山代町 大草町	自然河道を検出。古墳中期～後期の土器類のほか木製品も出土。	

年度	遺跡名	所在地	遺跡の概要	報告書
平成 13年度 (2001年)	荒隈城跡 (小十太郎地区)	国屋町	荒隈城に関する遺構・遺物は確認されず、近世以降の古墓群を検出。暮木から近代にかけての陶磁器、土師質土器が出土。	平成14年 (2002年) 刊行
	法古遺跡	法吉町	土壌や杭列を検出。弥生～10世紀の土器のほか、田下駄などの木製品も出土。	
	山津窯跡	大井町	窯跡推定地以西の水田を調査。土壌、溝状遺構、旧河道などを検出。古墳から奈良時代の遺物出土。	平成18年 (2006年) 刊行予定
	田和山遺跡	乃白町 (現田和山町)	南側丘陵の東西両斜面を調査。建物跡、土城、小石棺、自然流路などを検出。	平成17年 (2005年)
平成 14年度 (2002年)	石田遺跡	浜佐田町 藤津町	弥生中期～奈良時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、墓塚、水溜遺構等を検出。木製品が大量に出土。	平成14年 (2002年) 刊行
	法古遺跡	法吉町	湿地層から弥生～10世紀の土器片と木製品が出土。	
	田和山遺跡	乃白町	自然流路跡、掘立柱建物、小石棺を検出。	平成17年 (2005年)
	犬丸遺跡	上大野町	溝2条・土壌3基を検出。	年報Ⅳ (平成15年度) に掲載
	淡ヶ谷遺跡群 (指松遺跡)	大庭町	近世道路、連続ピットを持つ道路状遺構や溝状遺構、上幅6～7mの断面V字状～逆台形の大溝を検出。	平成18年 (2006年) 刊行予定
	山津窯跡	大井町	古墳時代後期・8世紀前半の須恵器窯跡のほか、道路状遺構・土壌等を検出。胸尾・陶棺片も出土。	
平成 15年度 (2003年)	石田遺跡	浜佐田町 藤津町	弥生時代の加工段と古墳時代前期の古墳1基を検出した。古墳主体部内から大量の玉類と銅鏡が出土した。	平成14年 (2002年) 刊行
	荒隈城跡	国屋町	大規模な土木工事による山城遺構を検出。	平成18年 (2006年) 刊行予定

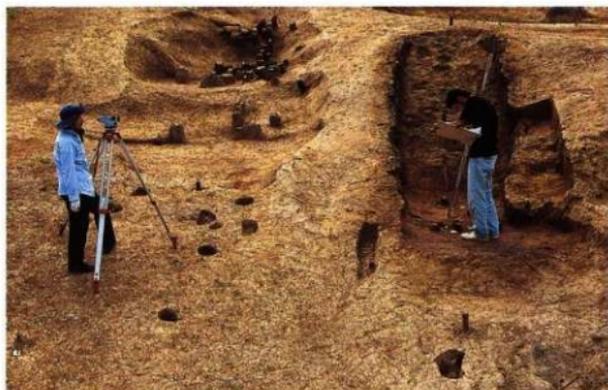
年 度	遺 跡 名	所 在 地	遺 跡 の 概 要	報 告 書
平成 15年度 (2003年)	葛沢砦跡	法吉町	砦などの城郭遺構は検出されなかったが、周囲の歴史的環境から城郭の一部であった可能性がある。	平成17年 (2005年) 刊行
	菅田横穴墓群	菅田町	横穴墓が22穴検出され、後背墳丘を持つ横穴墓も検出された。遺物は6～8世紀の後半の須恵器・土師器が出土。古墳1基、土壌1基も検出された。	
	洗ヶ谷遺跡群 (措松遺跡)	大庭町	近世道路、連続ピットを持つ道路状遺構や溝状遺構、上幅6～7mの断面V字状～逆台形の大溝を検出。	平成18年 (2006年) 刊行予定
	山津窯跡	大井町	窯壁と7世紀中～後半の須恵器が出土。	
	井廻古墳	上大野町	分布調査時には石棺の一部が残存していたが、本調査時には石材が全て抜け落ちていた。	年報Ⅱに 掲載
	宮ノ前遺跡	持田町	時期不明の竪穴住居跡2棟、土壌1基を検出。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が出土。	



洗ヶ谷窯跡 調査指導会風景



向山西遺跡 調査指導会風景



波ヶ谷1号窯 実測風景



波ヶ谷遺跡 作業風景



波ヶ谷遺跡 住居跡発掘風景

埋蔵文化財課年報Ⅷ

2005年9月

発 行 財団法人
松江市教育文化振興事業団

印 刷 有限会社 スタッフ
松江市上乃木4丁目7-28



波ヶ谷遺跡全景